秋季総体大阪大会

（10/12･13 長居第二）RESULTS

大会初日。１２時１０分。１年女子４×１００mR 予選。この種目は東雲の得点源となる期待の種目となる。三島地区大会の結果では５３秒９１の記録を持っている養精が優勝して圧倒的な力を持っている。５４秒５６の記録を持つ東雲との差は歴然であるが、大阪大会の表彰台を目指すことが大きな目標であった。各地区大会の結果では、１年４×１００mR の大阪中学記録に迫る５２秒２０の大記録を持つ咲くやこの花が優勝候補筆頭、さらには富田林葛城、東淀などのチームが有力校となっていた。７組７レーンに東雲が登場。お馴染みのブルーのセパレートユニフォームである。この種目で東雲は２０１１年には咲くやこの花に敗れるものの、５２秒０５の大阪中学新記録で２位になっている。さらに２０１０年には養精、松虫との僅差の勝負を制したものの、写真判定のトラブルで決勝再レースとなり、そのレースでも東雲が勝って優勝を決めた。思い出深い種目なのである。スターターのピストルが鳴り、第１走者の亀澤がするすると前に出る。早くもトップに出て、バトンは第２走者の山本光菜里へ。姉譲りのピッチを利かせてバックストレートを駆け抜ける。ややバトンが詰まったものの、バトンは第３走者の西川へ、完全にトップに躍り出ている。アンカーの畑田もバトンをもらうと、強い向かい風をモノともせずにそのままフィニッシュラインを駆け抜けた。１着。やがて速報の掲示板に記録が表示された。『２４２５３秒５８』このチームの新記録であり、全体の３番目の記録で決勝進出を決めたのである。その後のリレーミーティングでは、４人の選手は大喜びであった。

「きちんと戦い切らさなければならない」と強く思った。決勝再レースとなった２０１０年には「２年後に全国大会に行くようなチームを作ろう！」と、選手に言い聞かせて、実際に２０１２年千葉の全国大会で５位入賞したのである。（本気で日本一を狙っていたのですが･･･。）未来のことは誰にもわからない。それでも、明確な目標を持って１本、１本のレースにしっかり集中して戦い切れば、必ず夢は叶うことを歴代の部員たちが教えてくれていたはずだ。過去は変えることはできないが、未来は変えることはできる。その未来を変えるためには、現在（いま）に全力を尽くすこと以外に道はない。「さらに上を目指せ！」の檄に、４人は力強く頷いた。

１５時２５分。１年女子４×１００mR 決勝。４レーンに東雲、そのすぐ外側に養精、そして優勝候補筆頭の咲くやこの花が７レーン。スターターの閃光とともに８人の第１走者がきれいにスタートを切った。亀澤のスタートダッシュも悪くない。後半の走りもいつも以上の伸びがあった

ように感じた。第２走者の山本光菜里にバトンが渡る。このエース区間は１年生リレーながら見応えがあった。光菜里もバックストレートを爆走するが、養精の山田選手、咲くやこの花の島田選手の１２秒台スプリンターのスケールの大きい走りは迫力があった。バトンは第３走者の西川へ。彼女も１３秒台で走るスプリンターであるが、ここでも優位に立てない。それでも自分の走りを決して崩すことなく、アンカーの畑田にバトンが渡る。予想どおり、咲くやこの花と養精がその前に走り出している。畑田はピッチを上げ前を追う。そして後方のチームとの差も広げる素晴らしい走りを見せた。１着、咲くやこの花５１秒９８、２着、養精５２秒５５。そして３着が東雲、５３秒２４。この大舞台で５４秒５６のチームが５３秒台を連発して記録を更新しているのだ。立派なレースであった。レース終了後の表彰式では笑顔の４人。２０１０年の東雲の優勝記録は５３秒８８．この記録をはるかに上回る。「２年後の全国大会は北海道だよ。北の大地で大きな花を咲かせよう！」と、声をかけると４人はまたまた大歓声。もちろん、簡単な話ではない。今まで以上に日々の練習で鍛錬しなければならない。それでも、大きな夢を持つことからすべてが始まるのだ。あの時とまったく同じ４人の決意の表情を見て、自分もあの時と同じ決意を心に刻みこんだのである。

女子の中長種目でも得点を計算していた。２年女子８００mの梶山は、地区大会のときのような攻めのレースができずに、２分３４秒８２の記録であえなく予選落ちしてしまった。２分２５秒前後に記録を期待していただけに残念な結果となった。２・３年女子１５００mに出場した高橋。すでに４分台の記録を持っていたので、この日の目標タイムは４分５０秒あたりであった。ところが、後半にスピードが思うように上がらず、５分００秒０１の平凡な記録で、わずか１００分の２４秒差で決勝進出を逃した。この流れで登場したのが１年生８００mに出場した木下茜。先の体協杯市民陸上で１５００m４分５１秒５５の好記録を出した木下だけに、決勝進出が目標ではなく、３位以内で表彰台に上ることが目標となる。大会２日目。１２時１０分。１年女子８００m予選２組。スタートから積極的に前に出る走りはいつもどおり。その後もピッチを緩めず快調に跳ばす。しかもラストの直線ではやや流す余裕の走りを見せる。１年生らしからぬクレバーな走りで２分２７秒５４で１着。難なく決勝進出を決めた。

１６時０５分。１年女子８００m決勝。予選から３時間５５分のスパンしかない。１年生にはきびしいプログラムとなる。スターターのピストルで勢い良く飛び出す３人の選手。このカ

テゴリーでは、もはや常連の３人となってしまった。東陽中学の宮出選手、そして弥刀中学の松元選手、そして木下。ジュニアオリンピック挑戦記録会決勝でもしのぎを削った仲である。この３人が１周目６６～６７秒あたりで通過。かなりのハイペースであでる。そこから、またバックストレートにかけてぐんとスピードが上がる。大きなフォームでスピードをあげていく３人の走りは圧巻であった。宮出選手が前に出る。最後のバックストレートで松元選手が木下の前に出る。そのまま３人がフィニッシュラインになだれこむ。１着、宮出選手、２分１９秒２７。大会新記録である。１年生としては全国トップクラスの走りである。２着、松元選手、２分２３秒５６。３着、木下２分２４秒２９。この大事な大会で自己記録を更新してみせたのだ。立派である。前回のジュニアオリンピック記録会で３位に敗れた時は号泣していた木下であったが、今回は静かにこの結果を受け止めようとしていた印象がある。表彰台で祝福の拍手を受ける木下。この表彰台に上った３人、そしてこのレースで４位になった浜寺南の由肥選手。これらの選手がこれから切磋琢磨しながら、大阪中学女子の長距離レベルを引っ張り上げていくことでしょう。夢はもちろん、全国やジュニアオリンピックの表彰台、そして全国駅伝。さらには都道府県対抗女子駅伝。夢は大きくふくらんでいく。彼女らのこれからのライバル対決ストーリーを楽しみにしている。

３年男子１１０ｍＹＨに出場した神原祐樹が素晴らしい走りを見せた。予選１組６レーンに登場。全国大会にも出場した５レーンの新北野中学校の吉馬選手が１着になったこのレースで、２着でフィニッシュ。１着が１４秒８６、そして神原が１５秒６３。追い風２．０ｍ。公認の大幅自己ベストである。「レースのハードリングを見ていて、１５秒台が出たことを確信したよ」記録の正式発表の前から、レース直後に声をかけたくらいです。

迎えた準決勝。各組２着と、３着以降の記録上位者２名が決勝進出の条件となる。２組のシードレーン６レーンに神原が登場した。隣の７レーンの豊中１１中の谷選手と５レーンの古江台中の長友選手はこの種目で全国大会に出場した強豪選手である。さらには４レーンの松兼選手は走り幅跳び全国大会３位の選手である。このビッグネームといっしょに彼がシードレーンに配置されているのだ。決勝進出の可能性を期待しながら、運命のピストルが鳴った。１台目のアプローチはシードレーンの４人が先行し、大差がないように見えた。ハードル間９，１４ｍのインターバルを素早いリード足の振り下ろしをアクセントにして、次々と高さ９１．４cm のハードルを越えていく。１着谷選手、１４秒３６の全国レベルの好記録、２着、松兼選手、１４秒７１。これまた全国大会参加標準記録を超える素晴らしい記録である。そして、３着に長友選手、１５秒２５．神原は４着１５秒４４．

追い風３．４ｍながらまたまた自己最速のスピードで走りきったのである。結局、準決勝３組が終わって、神原の準決勝敗退が決定した。素晴らしいレースであった。やり切ったという彼の表情を見て、感動の気持ちでいっぱいになった。少しにじんだ風景の中、秋風が心地良く感じた。

大会２日目の最終種目。男女の共通リレー決勝の時を迎えた。男子は屈辱の予選コール漏れで決勝進出の力がありながら、この大舞台での最後の戦いをふいにしてしまった。悔やんでも悔やみきれない。女子は新型インフルエンザが猛威をふるって、選手が欠場してしまった２００９年以来、４年連続の決勝進出を果たし、しかも現在２連覇中というこだわりの種目でもある。大阪大会リレーの決勝には独特の雰囲気があり、しかも今シーズンのフィナーレを飾る最後のリレーの決戦を迎えることになる。選ばれし８チームだけが独占できる晴れやかな舞台となる。互いに声を掛け合う各チームの選手たち。３レーンは東雲、ブルーのセパレートユニフォームを着た大島が、この大舞台で第１走者を務めることになったのだ。

大島は１００ｍのベストタイムが１３秒９台の選手。つい１０日ほど前までは、９月２１日、２２日の体協杯茨木市民陸上が引退レースとなっていたのだ。ところが、そのレース後に話が急展開となる。選手権を走った山本光菜里は１年生リレーに起用することが決まっていた。ところが、谷田が左手を骨折、ほぼ同等の力を持つ棚江が肉離れという事態となってしまったのだ。１３秒８台の記録を持つ２年生の緒方、平岡は地区大会でそれぞれ際どい勝負となりながら、個人種目では大阪大会の出場権を得ることができなかったのである。想定外の出来事が度重なって、リレーの補欠に入っていた大島が出場することになった。本人には失礼だが、チームで９～１０番手の選手が大阪大会のリレーを走ることになったのだ。午前中に行なわれた予選５組５レーン。緊張の面持ちで手を挙げる大島。あれほど、嫌がっていたセパレートユニフォームを着ている。谷田のセパレートらしい。スターターのピストルが鳴り、大島がダッシュ。自分の走りを崩すことなく、第２走者の山本祐莉にバトンを託す。山元、村上とバトンが順当に渡り、記録は５１秒１７。予選全レースが終わり、東雲は全体で７番目の記録で決勝進出を何とか決めたのである。予選が終わってリレーミーティング。「この３年間いつもかげひなたなく、一生懸命に陸上競技に取り組んできた選手のことを、陸上の

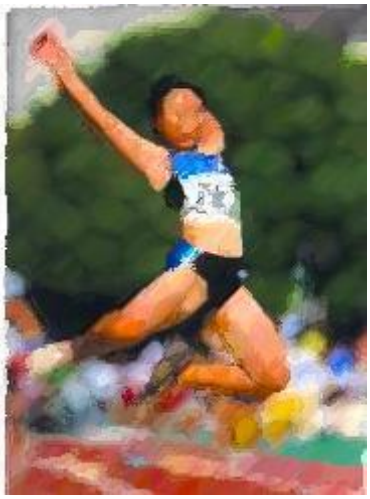
神様はしっかり見ていてくれたんやな。その選手に大阪大会決勝の晴れの舞台を用意してくださったんだよ」と、声をかけると大島は泣き出した。彼女は東雲ブルーのセパレートユニフォームを着てバトンをつなぐことが、どれだけ大きな意味を持つのかがよくわかっているのだ。予選のレースでいくつかの重圧を乗り越えて、彼女は持てる力を十分に出し切った。大役を何とかやり切って安堵を迎えるはずが、さらに決勝レースという大きな試練と戦わなければならない状況になったことで、さらに大きな覚悟が必要となったのだ。長居第二競技場のウォームアップ場はバックストレート裏にある。そこに足を運んでみると、各チームが決勝レースに向けて、気合いの入った調整練習をおこなっていた。東雲チームはバトンフロートで短いダッシュを繰りかえしている。大島は泣いている。泣きながら、必死でバトンをつないでいたのだ。「泣かなくていいよ。現状でベストのメンバーを組んで決勝を走るのだから･･･。今まで一生懸命に陸上競技に取り組んできたことに対する、陸上の神様が大島に与えたご褒美なんだから････。堂々と走っておいで！」と声をかけた。彼女は笑顔で頷いたが、涙が決して止まることはなかった。

１６時２０分。共通女子４×１００mリレー決勝。「ゆぅきぃ～！」「ゆぅうりぃ～！」「かぁーほぉ～！」「みぃずぅきぃ～！」「しぃののめぇ～！」メインスタンド東雲ベンチから大きな声援がとぶ。「３レーンは東雲、そのオーダーは･･･」またそこで拍手。大一番を迎える儀式とも言えるアナウンサーのレーン紹介。そしてメインスタンドから湧き起こる拍手と歓声。もはや大島有紀の目に涙はなく、凛とした決意の表情であった。スターターのピストルが鳴り響いた。大島の動きが躍動していた。魂のこもった見事な走りであった。思わず息を呑んだ。バトンはエースの山本祐莉へ。決勝の第２走者のスピード合戦で、これまでに何度も誇りを持って戦ってくれていた。彼女のこの姿を見るのも見納めとなる。あっという間に、バトンは阿吽（あうん）の呼吸で第３走者の山元佳保へ。２年前には低学年リレー、１年リレーでバトンをつないだ仲である。彼女の走りを目に焼きつけた。第４走者の村上がマークを見て飛び出した。彼女らリレメンの最後の継走となる。しっかりと握りしめられたバトン。村上は風のようにホームストレートを駆け抜けた。フィニッシュラインを走り抜けると、２０１３年度シーズン、最後のリレーレースが終了した。

結果は６位。記録は５０秒６７。大島の走りがいかに素晴らしかったかがわかる記録である。華やかな表彰式がおこ

なわれる頃、彼女ら４人が第二曲走路付近に集まった。駆け寄って「大島、素晴らしかったよ！すごいよ!!　東雲のリレーの伝統は見事に受け継がれたね。」彼女はまた涙、涙、涙‥‥。泣きながら、笑っている。他の３人も笑顔。東雲のリレーメンバーとして、数々の試練や重圧を乗り越え、正々堂々と戦いきった者だけがわかる喜び。その喜びを分け合いながら、引退の時を迎えたのである。

１年女子１００mに出場した山本光菜里は、夏の通信大会３位に入り近畿大会に出場した選手。今大会でも３位以内、それから初の１２秒台を狙っていたが、予選が１３秒２３、準決勝が１３秒３４。そして、決勝も１３秒２０と質の高い３本のレースを見せたが、残念ながら３本とも追い風参考記録に終わってしまった。１年生ながら、来年の共通リレーの柱になってもらわなければならない選手。負けの悔しさで落胆するのではなく、未来への起爆剤として冬季練習をしっかりやり切らせたい。姉の山本祐莉は体育大会でブロックリーダー長をつとめ、見事にやり切ったのであるが、そのためにまったく練習の積み上げができなかった。練習不足で大会にのぞんだ現状では、３年女子１００mで１２秒７９、７位という成績はやむを得ない。１年男子１５００mに出場した奥村日向も順当に決勝進出を果たしたが、決勝レースは出し入れの激しいレースとなって、４分３７秒１５の平凡な記録で８位にとどまった。３年女子１００mJH に出場した村上瑞季も１４秒６２の自己ベスト更新を狙い、予選もその組でトップ、準決勝でもその組のトップと順当に決勝に駒をすすめたが、決勝ではその流れを生かし切れず、まさかの１４秒８１で５位。大阪の女子ハードルのレベルがいくら高いと言っても不満の残る結果となった。２週間後に控えたジュニアオリンピックではぜひ入賞を果たしてリベンジしたい。



「私たちは、歴代の先輩たちのように強くないし、総合優勝ができるようなチームになれないかも知れません。それでも、一生懸命に頑張って東雲の伝統を‥‥。」泣きながら、女子の新キャプテンの平岡が話し出した。秋季総体大阪大会が終了してミーティング最後の場面で、３年生に向けてねぎらいの言葉を述べていた時である。男子の新キャプテンの植田

航太も並々ならぬ決意の言葉を口にした。すなわち、３年生チーム引退の日である。いつも言うことだが、決して順風満帆であったわけではない。ひょっとしたら、うまくいかないことの方が多かったかも知れない。それでも最後まで続けてきたからこそ、わかる感動があり、そこに大きな価値がある。終わりがあるということは、始まりがあるということでもある。大きな節目の時である。この節（ふし）が大きければ大きいほど、その道のりは揺るぎのない強いものとなる。来年は東雲陸上部の正念場となる。「メイク　レジェンド！（伝説をつくれ）」を合い言葉に、この冬季をしっかりがんばることでしか道は拓けない。